

Latin American Conference on Pattern Languages of Programs
におけるワークショップ実施と
「Personal Picture Method」の向上に向けた研究発表

総合政策学部4年 鎌田 安里紗

1. 活動日程・場所

11/9 - 12 ブラジル連邦共和国サンパウロ州・イリャベラ

2. 活動の目的

本研究は、パターン・ランゲージの考え方をを用いて各人が自分で自分の生き方をデザインすることの支援を目的としている。今回の活動では、昨年7月にドイツで開催されたパターン・ランゲージの国際学会 European Conference on Pattern Language of Programs (EuroPLoP) で発表した研究成果である『Personal Culture Patterns (パーソナルカルチャー・パターン)』を用いた新たな方法論として「Personal Picture Method (パーソナル・ピクチャー・メソッド)」の提案をブラジルで開催されるパターン・ランゲージの国際学会 Latin American Conference on Pattern Languages of Programs (SugarLoafPLoP) で行い、他の参加者からアドバイスをもらうことで、研究成果のクオリティ向上を目指す。また同学会にて、これまでに何度か国内で開催している「Personal Picture Method (パーソナル・ピクチャー・メソッド)」を用いたワークショップ「Self Travel Café」を実施し、国外での開催実績を残すと同時に、ワークのレベルアップを図る。

3. 活動の成果

今回の活動を行うにあたり、期待されていた効果は3つあった。1つは、パターン・ランゲージのエキスパートから本研究についてのコメントを頂くことで、研究成果の改善をはかること。次に、国際学会という場での論文発表によって研究成果に対する信頼性が増すこと。そして、パターン・ランゲージに精通する学会参加者に向けてワークショップを開催することで、本研究の価値や

新規性をアピールすることが出来ることだ。

1 つめについては、学会開催前に事前に学会側から割り当てられる論文指導者と論文改善のための意見交換を行う「シェパードイング」というプロセスにおいて、ワークショップのプロセスをより明確に示すことが出来るようになった。それを学会内でのワークショップの実践に活かすこともでき、今回の活動の一連の流れを通して、研究成果の大幅なレベルアップを図ることが出来た。また、学会中のプレゼンテーションとワークショップを通して、各国から集まったパターン・ランゲージのエキスパートに自らの研究に興味を持ってもらうこともでき、今後の展開につながると考えられる。さらに、学会での評価が今後の自信につながると同時に、国内でワークショップを開催する際の信頼にもつながると考えられる。



プレゼンテーションの様子 ワorkshopの様子 ワorkshop参加者の様子

4. 今後の課題

学会内でのワークショップの実施を通して、このワークショップが効果的に機能する年齢が若年層であるということ、そして組織内でのワークショップの実施がコミュニティビルディングの力を持つという可能性が見えてきたので、更なる活用の方法を模索していきたい。また、学会中のコメントやアドバイスをもとに理論の深化にも努めていきたい。

5. 謝辞

ご指導いただいた井庭崇先生をはじめ、井庭研究室のメンバー、助成金をいただいた湘南藤沢学会様の手助けによって、研究をより深めることができました。心より感謝申し上げます。